

ねん がつ むいか  
2021年2月6日

ねんかんだい しゅじつ  
年間第5主日

きくち いさおだい しきょう  
菊地 功大司教 メッセージ

「近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは宣教する。そのためにわたしは出てきたのである」

先週のマルコ福音は、神の真理に裏打ちされた権威ある言葉を語るイエスを伝えていました。今週のマルコ福音はその続きです。先週と同じようにイエスは「悪霊にももの言うことをお許しにならなかった」と記されていますから、権威を持って言葉を語り、人々が驚くような業を行っています。弟子となったシモンのしゅうとめの熱をさらせたことを皮切りに、多くの病人や悪霊に取り憑かれた人をいやしていったと記されています。

マルコ福音がこの話を通じて描こうとするイエスの姿は何でしょうか。もちろん先週と同様、権威あるイエスの姿であるとも言えますが、それ以上に、イエスの愛といつくしみをこの行いは象徴しています。マルコ福音が「病人や悪霊に取り憑かれた者」と記す人たちは、さまざまな困難を抱え、人生を、いのちを生きることには希望を見いだすことが出来ずにいる人たちです。神の愛といつくしみのものであるイエスは、そういった人々を目の前にしたとき、放置しておくことは出来なかった。いのちをより良く生きることが阻んでいる悪にとらわれている人たちを、解放しました。

イエスは真理に裏付けられた権威ある言葉を語る強い存在であると同時に、あふれんばかりの神の愛といつくしみを体現する存在でもあることを、マルコ福音は伝えています。

パウロはコリントの教会への手紙で、「弱い人に対しては、弱い人のようになりました。弱い人を得るためです。すべての人に対してすべてのものになりました。なんとかして何人かでも救うためです」と記し、「福音のためなら、わたしはどんなことでもします」と宣言しています。

イエスや、それに倣うパウロの姿勢は、高いところから教え導くのではなく、困難を抱

え希望を失っている人たちのところへ出向いていき、なんとしてでも神の救いの希望に  
与ることが出来るようにと手を差し伸べる姿勢です。教皇フランシスコは、そのこと  
を、「出向いていく教会」という言葉で表しています。だからこそイエスは、一つのと  
ころに留まって、褒め称えられるのではなく、ひとりでも多くの人に生きる希望を生み出  
すために、村々を巡って「出向いていく」のです。

教皇フランシスコは使徒的勧告「愛のよろこび」にこう記しています。

「大切に思っている人それぞれを、神のまなざしをもってじっくりと見つめ、その人の中  
におられるキリストに気づくことは、深い霊的体験です。・・・イエスは模範でした。誰  
かが話そうとして近づくと、イエスはその人にまなざしを据え、愛をもってじっとご覧  
になったのです。イエスの前でないがしろにされていると感じる人はいません」(323)

昨年来、感染症の困難の中で、さまざまな側面での生きづらさを抱えておられる方が少  
なくありません。病気だけでなく、経済や職業や法的身分など、さまざまな側面で困難  
を抱え、人生を、いのちを生きることには希望を見いだすことが出来ずにいる方、不安の内  
に生きておられる方がおられます。わたしたちは、イエスのまなざしで「じっくりと見  
つめ、その人の中におられるキリストに気づく」者でありたいと思います。いのちの希望  
を生み出すため、ひとりでも多くの人に救いをもたらすため、「福音のためなら、わたし  
はどんなことでもします」と宣言したパウロに倣って、わたしたちも必死になって福音  
に生き、福音をあかしし、福音を伝えてまいりましょう。